

先生の機嫌がよいとき……ゆとり

京都女子大学附属小学校校長 吉永 幸司よしなが こうし

―先生の機嫌がよいとき―

「国語の勉強が好きになるのはどんなときですか。」というアンケートを子どもたちにしたことがあります。回答に「先生の機嫌がよいとき」というのがあり、苦笑いしながら処理をした記憶があります。しかし、よく考えると、その回答は、学習意欲が教師の仕草や対応、表情と関係することを示したものと見て貴重なものなのです。国語の授業は、教師と子どもとの言葉のやりとりが大きな位置を占めています。教師の表情や仕草、特に、聞く姿勢は、子どもの意欲と大きくかわるからです。

「機嫌がよいとき」のわたしは、「この子の伝えたいことはなんだろう。」「と真剣に聞いたり、「そうだね。」「それで。」「と話を引き出すように相づち打って聞くことが多いのです。つまり、気持ちに「ゆとり」があるのです。先生方に「ゆとり」があると、落ち着いた雰囲気です。

きないことを責める気持ちがありました。

せつかにあれやこれや注文をつけたのも、指導に自信がないから、子どもの気持ちにまで思いが届かなかったのです。指導に自信がないと注意が多くなります。

三 子どもの学びに寄り添う

このことに気づいたのは、作文の指導が少しわかりかけたころの「書けない」という子への対応です。

指導に自信がなかったら、きつと、「よく思い出して」「大きなことを落とさないで」という注文をつけたのでしようが、そのときはそうではありませんでした。

「書く材料が見つからないときだってあるよね。」

と、まず、書けないことを受け入れ、テーマにかかわる話を聞き出すようにしたのです。しばらくすると、

「先生、書くことが見つかったよ。」

と、気持ちのよさそうな顔で鉛筆を動かし始めました。そのときのわたしには、「書けないのが当たり前」という気持ちで、どこまでも子どもに寄り添って「いつかいつかゆとりがありました。」

指導に自信があると、子どもの気持ちに寄り添うことができるのです。きつと、「機嫌がよい」と子どもには見えていたのだと思います。

もと対応できるので表情も軟らかくなっているのでしょう。

二 指導に自信がないとき、子どもを責めている

わたしがまだ算数の指導に自信がなかったときのことです。割り算がわからないという質問をした子がいました。質問の内容だけ教えてやればよかったのですが、ノートの使い方、数字の書き方も気になり、この時ばかり機関銃のように「式を正しく書きなさい。」「数字は丁寧に書きましよう。」「と注文をつけたのです。説明の途中で、「もついいわ。」「といって逃げてしまいました。それどころか、その後、その子が質問してくることはありませんでした。きつと、「先生は機嫌が悪い。」「という気持ちで逃げていったのだと思います。事実、わたしの気持ちのどこかに、「わかりやすく教えてあげているのに、どうしてこの子はわからないのだろう。」「と理解で

四 「授業が始まります。」と「授業が始まっています。」

授業が始まって、遊びに夢中で、教室に空席が目立つような時期がありました。最初は、「遊びを切り上げて授業に遅れないようしなさい。」「と注意をしたのですが、効果がありません。方法を変えて、チャイムとともに教室にいる子だけで、教科書の音読を始めました。授業に遅れた子には、「もう授業が始まっているよ。」「と合図の目くばせをするだけです。その子は、慌てて教科書を出し、汗を拭く時間も惜しんでいつしよに読み始めたのです。

「みんなに迷惑をかけないように、教科書を出していつしよに読もうとしたのが立派だよ。」「と、遅れたことより、みんなといつしよに授業に進んで参加しようとした態度をほめました。その後、この方法を続け、気がついたら、授業の始まりに空席はなくなっていました。

「授業が始まりますよ。」「と注意をしただけでは効果がないので、「授業が始まっていますよ。」「と、子ども自身が気づくことを待つという気持ちから生まれた知恵です。叱られると思っていたのにそうでなかったという意外性が、子どもの心を動かしたのでしょうか。そのときは子どもにはきつと、「先生は機嫌がよい」と見えたのでしょう。